

中村町遺跡5

—中村町遺跡第6次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書

第1160集

2012

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面し古くから大陸との文化交流の玄関口であった福岡市には、豊かな自然と文化が残されています。これらを保護し、未来へと伝えていくのは本市に課せられた責務であります。しかし、近年の著しい都市化による市街地の拡大により、その一部が急速に失われつつあることもまた事実です。福岡市教育委員会は開発によってやむを得ず失われていく遺跡について、事前の発掘調査を行い、記録の保存に努めています。

今回報告する南区の中村町遺跡の発掘調査報告書は若久中公園整備事業に伴う調査成果についての記録です。この調査では古代と思われる柱穴群の他、風倒木の根痕と思われる窪みから黒曜石片などが出土しました。本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料として御活用頂ければ幸いに存じます。

最後に発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対して心から謝意を表す次第であります。

2012年3月16日

福岡市教育委員会

教育長 酒井龍彦

例言

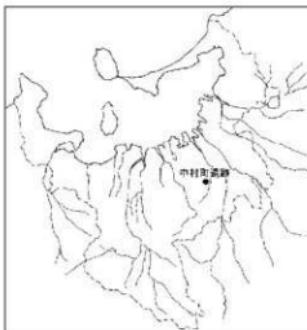
- 本報告書は南区若久1丁目11番地内の若久中公園整備事業に伴って2010年10月26日から11月26日にかけて発掘調査を行った中村町遺跡第6次調査の報告書である。
- 本書に収録した発掘調査は福岡市教育委員会の屋山洋が担当した。
- 遺構・遺物実測、遺構・遺物の写真撮影は屋山が、製図は熊谷幸重が担当した。
- 本書で用いた方位は磁北である。
- 本書に関わる図面・写真・遺物など一切の資料は福岡市立埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。

遺跡調査番号	1029	遺跡番号	0167	分布地図番号	高宮51
調査地地番	福岡市南区若久1丁目11番地内				
開発面積	325m ²	調査面積	163m ²	調査原因	公園建設
調査期間	2010年10月26日～2010年11月26日	担当者		屋山 洋	

中村町遺跡5

—中村町遺跡第6次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書
第1160集



遺跡略号 NMM - 6

調査番号 1029

2012

福岡市教育委員会

本文目次

I はじめに	1
II 調査の記録	7
1 調査の概要と経過	7
2 遺構と遺物	7
1) 掘立柱建物	7
2) 土坑	10
3) 井戸	10
4) 溝	10
5) その他の遺構と遺物	12
3 小結	12

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)	3
第2図 調査地点位置図 (1/6,000)	4
第3図 調査地点周辺図 (1/800)	4
第4図 4次・6次調査区関係図 (1/200)	5
第5図 調査区全体図 (1/100)	6
第6図 遺構遺物実測図1 (1/40・1/2)	8
第7図 遺構遺物実測図2 (1/40・1/2)	9
第8図 その他遺物実測図 (007～009は1/1・1/2)	11

表目次

表1 中村町遺跡調査一覧	2
表2 遺構一覧	12

挿図目次

図版1 1. 調査区全景 (南西から)	2. SB01 (西から)	13
図版2 1. SE008 (西から)	2. SD007 土層 (北から)	14
図版3 1. SD017 土層 (南から)	2. 谷部確認トレンチ (南から)	15
図版4 1. 4次調査全景 (南西から 手前が6次調査)	2. 4次調査全景 (北から)	16

I はじめに

1 調査に至る経過

平成 22 年（2010 年）6 月 14 日付けで住宅都市局公園緑地部公園建設課より福岡市教育委員会埋蔵文化財第 1 課に福岡市南区若久 1 丁目 11 番地内における埋蔵文化財の事前審査依頼（事前審査番号 22-1-51）が提出された。申請地は平成 18 年 10 月 4 日の試掘調査（事前審査番号 18-1-64）により表土直下のローム層上面で包含層が存在することが確認されており、また、東側隣接地の 4 次調査でも縄文時代晚期と古代の遺構の存在が判明している。これらの結果と今回の公園建設計画と照らし合わせると遺跡の破壊が避けられない事が判明したため、工事に先立って埋蔵文化財の発掘調査を行い記録保存を図ることで協議が成立し、以上を受けて平成 22 年（2010 年）10 月 26 日から 11 月 26 日の期間で発掘調査を行った。

調査期間中は原作者及び関係者各位から多大なご協力を得た。記して感謝したい。

2 調査の組織

調査主体

教育委員会文化財部埋蔵文化財第 2 課

埋蔵文化財第 2 課課長 田中壽夫

調査第 1 係係長 米倉秀紀

調査庶務 井上幸江

調査担当 屋山 洋

作業員 浦伸英 岡部安正 片岡武俊 河原明子 桑原美津子 静啓子 戸山龍男 中村健三

中村尚美 平田周二 吹春憲治 御手洗史子

整理作業 熊谷幸重 藤野洋子

3 遺跡の立地と環境

中村町遺跡は片廻山から北東に延びて福岡城に達する第 3 紀層を基盤とした丘陵上に位置する。この丘陵は東の那珂川と西の樋井川の流域を分ける丘陵で、現在は多くの谷の解析により分断された丘陵群となっている。中村町遺跡はこの片廻山と福岡城の間のほぼ中間地点にあたり、丘陵西側端部に位置する。丘陵東端には警固断層が存在しており、断層による地盤沈下と那珂川によって堆積した土砂によって現在丘陵と那珂川の間には幅 2 km 弱の平地が広がる。この平地が形成された時期はよく判らないが、ある時期までは海が入り込んで入り江となっていたとの話があり、西鉄大橋駅東側の「塩原」の地名は付近にあった塩田の名残との説も存在する。少なくとも縄文海進が最も進んだ縄文前期には那珂川流域に沿って海が入り込んでいた可能性があり、その場合中村町遺跡の北側に内湾が広がっていた可能性がある。また、古代になると丘陵東端に鴻臚館と大宰府を結ぶ官道の 1 つである「西門ルート」が築かれるが、中村町遺跡の北側を通る通称「大池通り」は中村町遺跡がのる丘陵と北側の鴻巣山の間の谷部を通る東西方向の道で、古来から那珂川流域と樋井川流域を結ぶ交通路として利用されていた可能性があるり、「西門ルート」との分岐点に位置し交通の要所であったと考えられることは、遺跡内で確認されている古代の遺構の性格を考える上で重要なポイントであると思われる。

中村町遺跡のこれまでの調査

中村町遺跡では2011年4月の時点で6次の調査が行われている(第2図)。遺跡周辺は福岡平野の西側に接する高台に位置し、早い段階で都市化が終了したため街中にありながらこれまで発掘調査の機会が少なかった。しかし、下の中村町遺跡発掘調査一覧表が示すとおり2005年以降は再開発が遺跡の範囲に及び始めたためか、最近では調査件数が増化傾向にある。

1次調査は遺跡中央からやや北側に位置する。中村町遺跡がのる丘陵は南北両端が小高く中央に若干の平坦地があるが、1次調査は北側の高まりから南側に傾斜する斜面と中央平坦地との境界部分に位置する。遺構は古墳時代後期の竪穴式住居20軒と古代の掘立柱建物が2棟、柱穴状遺構群が出土した。遺構は東西両端で検出したが、中央は削平をうけており本来は全体に分布していたと思われる。住居は密度が濃く、多くが切り合っているため全体が残るものは少ない。数軒の住居が窓をもつ。掘立柱建物の1棟は2×7間と大型で梁行3m、桁行き12.7mを測り、建物の北側と西側を囲むように溝が巡る。時期は7世紀後半から8世紀初頭である。その他に縄文時代に属する可能性がある打製石斧が出土している。

2次調査は遺跡中央部西側の道路拡幅に伴う調査である。丘陵西側の谷部に位置しており、調査区全体が河川堆積土である。現地表面から2m程下の暗灰色粘質土上面で古墳時代から古代の土坑と柱穴が出土した。3次調査は遺跡の北端部に位置し、弥生時代終末から古墳時代前期の竪穴式住居や掘立柱建物、土坑が密集して出土した。竪穴式住居は弥生時代終末から古墳時代初頭が12軒、古墳時代前期が1軒、古墳時代後期が1軒出土した。住居群は密度が濃く、多くが切合っていて遺存状況は悪い。遺物は縄文時代の石匙や石鎌なども出土している。4次調査は今回報告する6次調査の北東側隣接地に位置する。丘陵のほぼ頂部に位置し、西側裾部との高低差は10mを測る。丘陵頂部の平坦面は幅が40~60mと狭いが、その平坦面を区画する溝や掘立柱建物など官衙もしくは居館の一部と思われる遺構が出土した。5次調査は遺跡北端部の3次調査の東隣に位置する。現GLから80cm下の灰黄褐色土上面で古代の溝、掘立柱建物と弥生時代中期~古代の遺物を含む包含層が出土した。また灰黄褐色土の下の砂疊層から縄文時代前期中頃~中期初頭の遺物が多量に出土した。

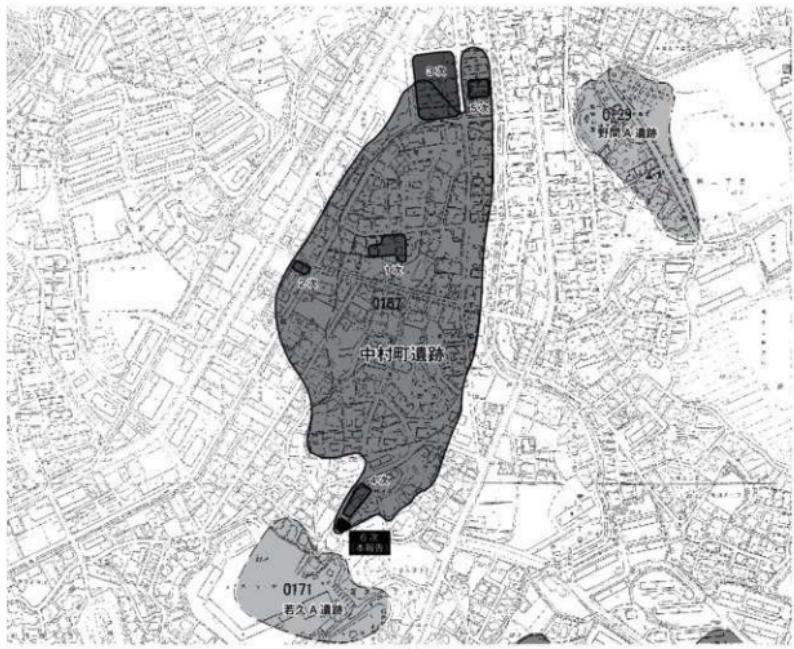
今後の調査 中村町遺跡が乗る丘陵は全体が大きく造成されており、遺構が消滅した所も多いと思われるが、丘陵上に広がる縄文時代晚期前半と弥生時代中期~古墳時代初頭にかけての集落、大型掘立柱建物や区画溝などの古代官衙の遺構群、そして遺物だけは多く出土しているもののまだ遺構が確認されていない旧石器時代と縄文時代前期中頃から中期初頭の集落などが今後の調査で出土するものと思われ、今後の調査が期待される遺跡のひとつである。

調査次回	調査期間	遺跡所在地	現地面積(調査面積)	主な遺跡	主な遺物	報告書名	報告書番号	刊行年
1次	1990/12/1 - 1991/02/28	南区野間3丁目233-234-1, 234-2, 236, 237	1338 m ² 821 m ²	竪穴式住居 12軒(古墳時代後期), 大型掘立柱建物1棟(2×6間)	須恵器、土器、石器(6世紀後半) 柱跡(中世), 石斧(縄文)	[中村町遺跡-1]	第373集	1994年
2次	1996/12/03 - 1996/12/04	南区野間4丁目地内	21 m ²	土坑7基、柱穴	土器片、須恵器	福岡市埋蔵文化財保管課V-011		1996年
3次	2005/01/11 - 2005/02/28	南区野間3丁目117-118番	5087.93 m ² 844 m ²	弥生時代-古墳初期(住居12 棟+建物1), (区画前期+建物1), 古墳中期(住居1-4), 古墳後期(1-11)	須恵器(1-2世紀), 土器 (古墳時代前半), 墓葬(6 世紀)	[中村町遺跡-2]	第891集	2006年
4次	2009/05/11 - 2009/07/07	南区若久1丁目123番4- 128番2	2061 m ² 667 m ²	埋甕(縄文時代前半), 土坑1 基(古墳時代), 漢4条(1), 掘立 柱建物2棟(7-8世紀), 漢 1基(12世紀後半)	須恵器(縄文時代前半), 土器 (古墳時代), 瓦器(7-8世紀), 須恵器, 須恵器	[中村町遺跡-3]	第1122集	2011年
5次	2010/05/24 - 2010/06/20	南区野間3丁目160番3	650 m ² 650 m ²	溝、土坑、掘立柱建物(古代), 須含器(1), 石器, 瓦器(古 墳時代中期-古代), 河原(縄 文前期), (中世-古代), 白磁,	須含器, 瓦器B式, 须含式土器, 須含器(1), 石器, 瓦器(古 墳時代中期-古代), 白磁, 瓶底(縄文前期-中期)	[中村町遺跡-4]	第1159集	2012年
6次	2010/06/26 - 2010/11/26	南区若久1丁目	325 m ² 163 m ²			[中村町遺跡-5]	第1160集	2012年

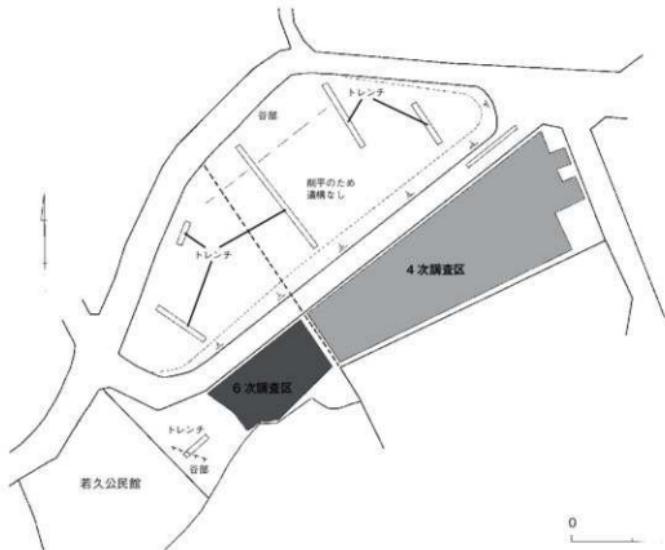
表1 中村町遺跡調査一覧



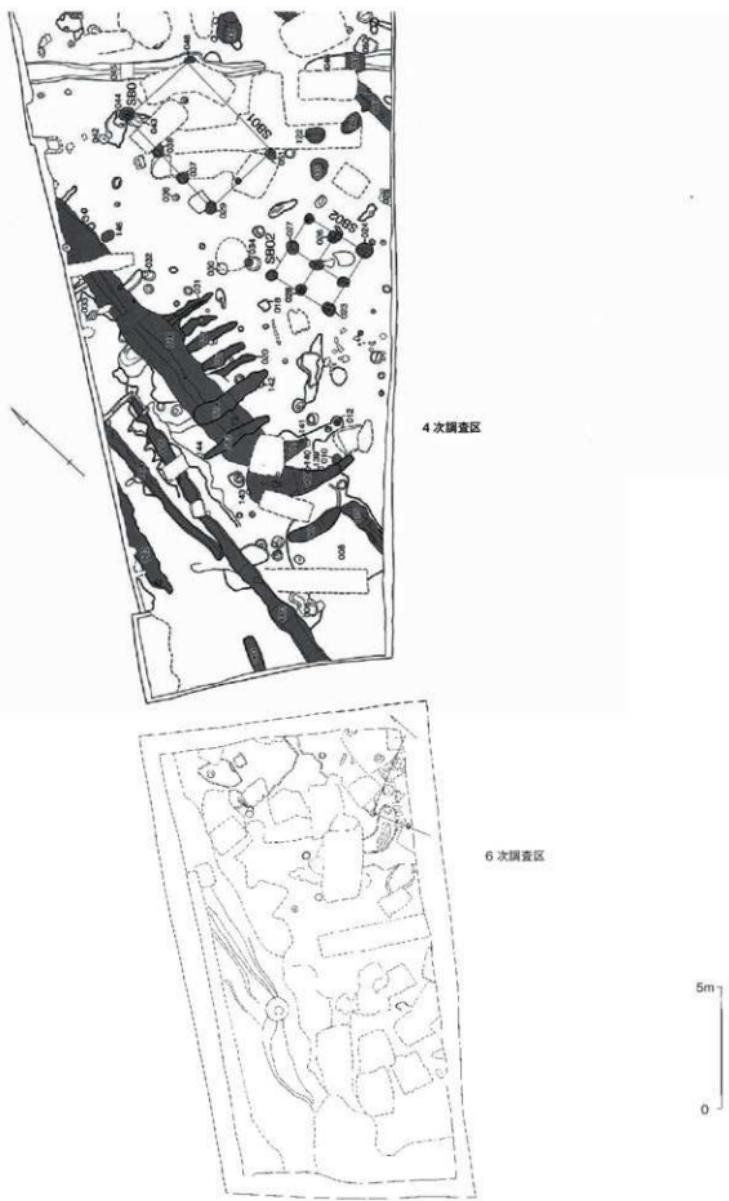
第1図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)



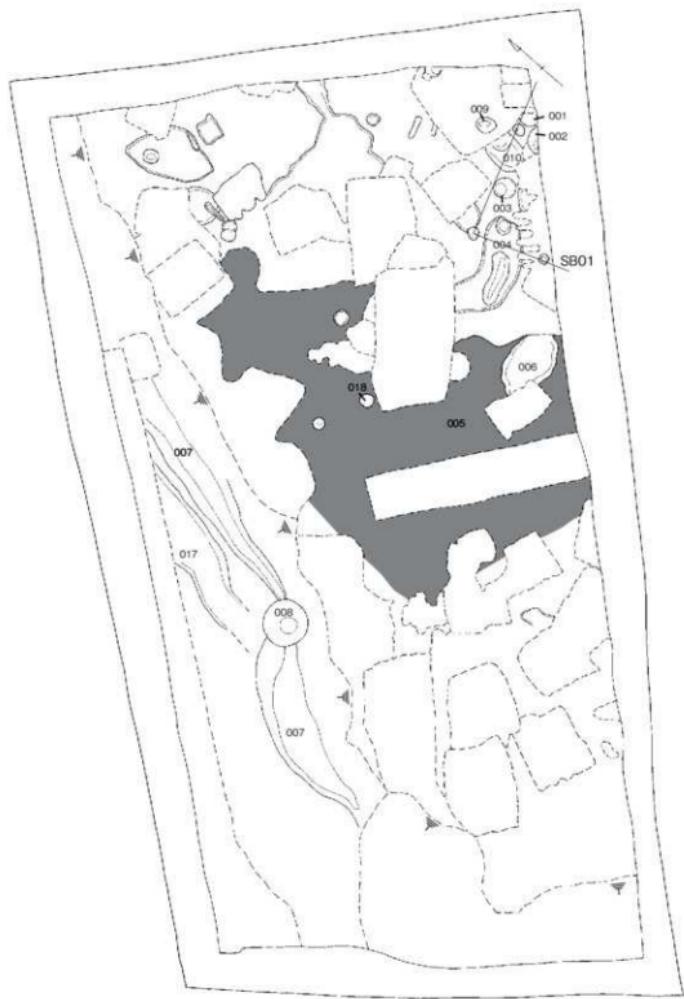
第2図 調査地点位置図 (1/6,000)



第3図 調査地点周辺図 (1/800)



第4図 4次・6次調査区関係図 (1/200)



0 4m

第5図 調査区全体 (1/100)

II 調査の記録

1 調査の概要と経過

申請地の面積は 1045m²を測り、東側の丘陵部と西側の低地に分かれ。申請地は本来中村町遺跡の隣接地で包蔵地外であったが、2006 年に行われた試掘調査（18-1-64 の申請に伴う）で表土下 80cm で鳥栖ロームの基盤に達し、その上面で遺構を確認したため、包蔵地を南西側に延長して中村町遺跡に含まれることになった。西側の低地部分は 2006 年の試掘調査と 2010 年の 4 次調査の際に実施したトレンチ調査の結果、大半の部分において表土直下で花崗岩の地盤に達し遺構は確認できなかった（第 3 図）。低地上に面した北西側斜面は現在急な傾斜であるが、本来は緩やかな傾斜であつたのを近年の造成工事で削って低地側の平坦面を広げたものである。調査区西端の幅 6 m 程は谷になつており、土器片等は出土しなかつた。谷の埋没は近代に入ってからと思われる。これらの結果から、西側低地に遺構が存在する可能性はないため当初から調査範囲から除外した。東側の丘陵部については、丘陵は北東から南西に延びており、申請地内では南西側に向かって緩やかに傾斜しているが、敷地南西端で検出した谷により、若久小学校がある丘陵の若久 A 遺跡とは分断される。現在公園の西側に建つ若久公民館は中村町遺跡と若久 A 遺跡の間の谷部に位置している。

丘陵部は面積 325m²を測る。調査前には南北 2 面の平坦面に段造成されていたが、調査時にトレンチを入れたところ、南側平坦面は表土直下で花崗岩の盤に達し遺構が存在しないことが判明したため、調査対象地を丘陵部北東側の約 163m²に限定して発掘調査を行った。調査時には南側の谷の正確な位置と埋没時期を確認するためトレンチを設定したが、検出した谷の端部は公民館との境界の擁壁から 2.5 m しか離れておらず、擁壁の保護を考えると掘り下げは困難であると判断して中止した。

調査は 10 月 26 日に発掘機材の搬入と草刈り、27 日に重機を使用して表土剥ぎを行い、翌 28 日から遺構検出と掘り下げを行った。遺構検出の結果、全体に県営住宅解体時のものと思われる廃材を埋めた攪乱があったため、先に攪乱を掘り下げ、その後遺構の掘り下げを行った。また調査区中央部には、地山のロームが汚れて暗茶褐色を呈す土が点在していたため（第 5 図）、その部分にグリッドを設定して、人力で掘り下げた。暗茶褐色土は浅い所で数 mm、深くても 2 ~ 3 cm の深さで橙色のロームに達しグリッド壁面での観察は出来なかつたため、ベルトは取り外して出土した遺物に 011 ~ 017 の番号をつけて遺物を取り上げた。調査は 11 月 25 日に終了し、26 日に機材の撤去を行い調査を終了した。

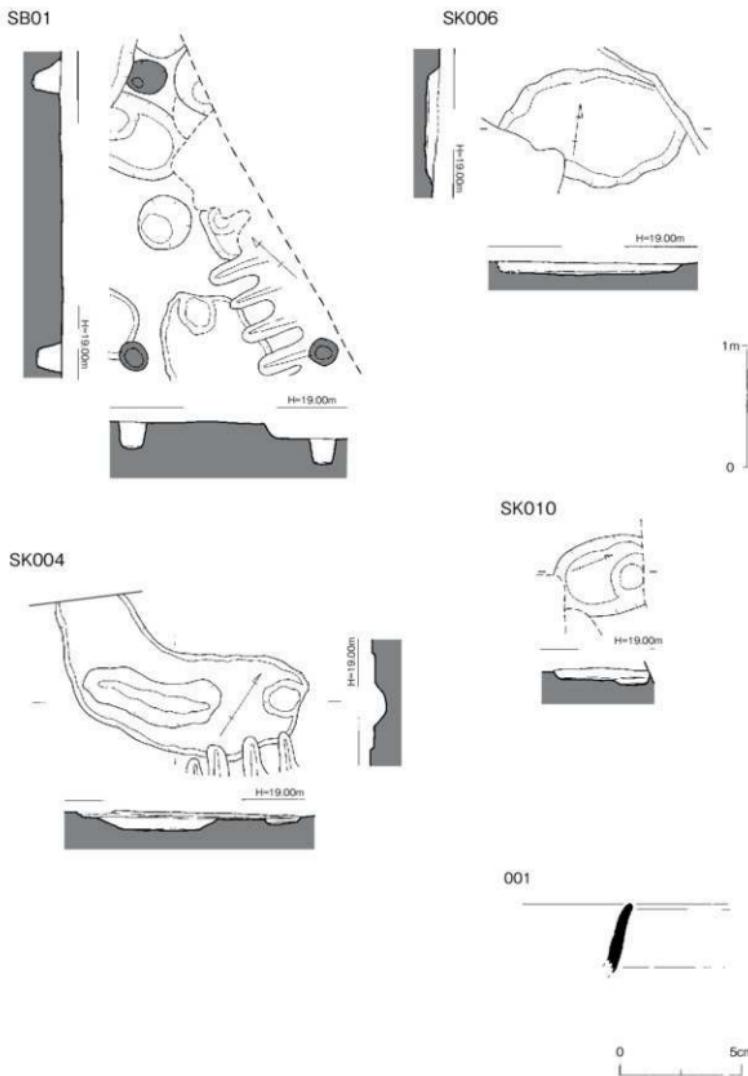
2 遺構と遺物

丘陵上部は畠の開墾や県営住宅の造成・解体に伴う削平を受けており、遺構の遺存状態は悪い。特に南西側は大きく削平されており、遺構は確認できなかつた。また、4 次調査と同様に県営住宅の解体時に重機で掘った穴に木材、瓦、コンクリート片などの廃材を埋めた攪乱を確認した。

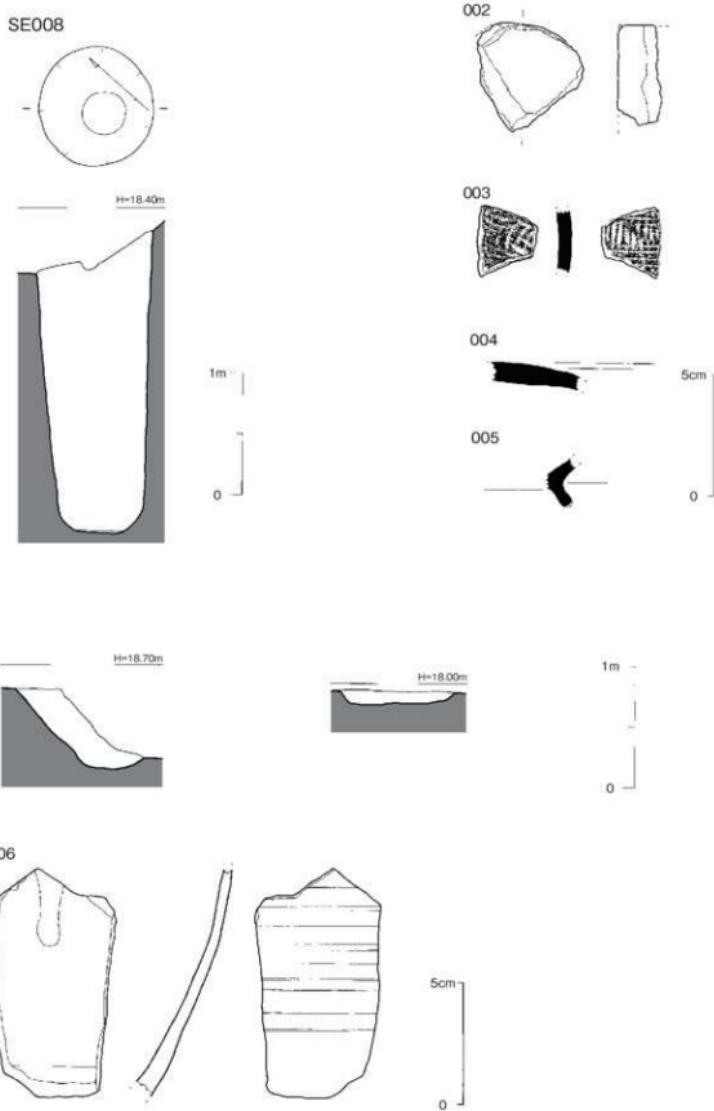
調査区北側で掘立柱建物 1 棟と土坑 3 基、柱穴群を確認した。また、中央部は遺構検出面の鳥栖ロームが若干黒ずんで暗茶褐色を呈していたため移植鍛で丁寧に掘り下げたところ、黒曜石小片が数点出土した。調査区の西側は畠の造成に伴い 80cm ほど切り下げた平坦面であるが、平坦面の縁で平行する溝 2 条と井戸 1 基を確認した。

1) 掘立柱建物 調査区の北東隅で掘立柱建物を 1 棟確認した。

SB01(第 6 図) 調査区東端に位置して調査区外に延びる可能性が高いため建物規模は不明であるが、



第6図 遺構遺物実測図1 (1/40・1/2)



第7図 遺構遺物実測図 2 (1/40・1/2)

現状で 1×1 m の建物で主軸は N – 49° – E を測る。柱穴の平面形はややいびつな円形もしくは梢円形で径 22 ~ 33 cm、深さ 20 ~ 33 cm を測る。柱痕跡は確認できなかった。梁間は 1.55 m、桁行きは 2.3 m を測る。出土遺物は無く時期不明である。4 次調査で出土した古代～中世の遺構群（掘立柱建物や溝）には主軸が同方向のものはない。

2) 土坑

SK004（第 6 図） 調査区東側に位置する。平面形は「く」の字状を呈し、西端を重機による搅乱に切られる。現状で長さ 2.2 m 程、幅 90 cm、深さ 3 cm を測る。底面東端に柱穴状の、また中央に長さ 113 cm、幅 34 cm、深さ 10 cm 程の溝状の掘り込みが見られる。遺物は黒曜石片が 1 点出土した。時期不明である。

SK006（第 6 図） 調査区中央やや東側に位置する。調査区中央に地山よりやや黒い暗茶褐色土が径 6 m 程のシミ状に広がっているが、006 はその東端に位置する。平面形は東西に長い梢円形を呈し、西端を重機による搅乱に切られる。現状で長径 1.6 m、短径 0.95 m、深さ 9 cm を測る。断面は浅皿状である。遺物は黒曜石片 1 点、サスカイト片 1 点と桂化木片が 3 点出土した。時期不明である。

SK010（第 6 図） 調査区の東端部分に入りする。平面形は南北に長い梢円形であるが、南北両端を搅乱に切られている。現状で南北 80 cm 弱、東西 63 cm、深さ 9 cm を測る。底面北端に径 30 cm、深さ 6 cm の柱穴状の掘り込みがある。遺物は古代の須恵器片が 1 点と素焼きの土器片が 1 点出土した。土坑としたが、その大きさから柱穴の可能性もある。出土遺物（第 6 図 001）。001 は須恵器壺の口縁部である。灰色を呈し胎土は細かい。胎土中に白色細砂を少量含む。

3) 井戸

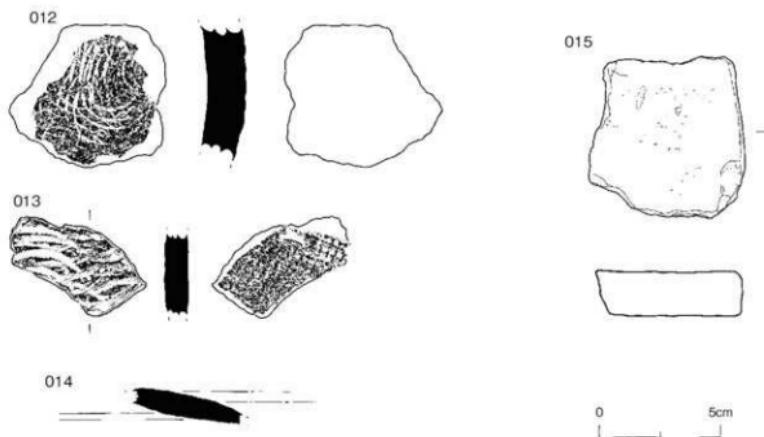
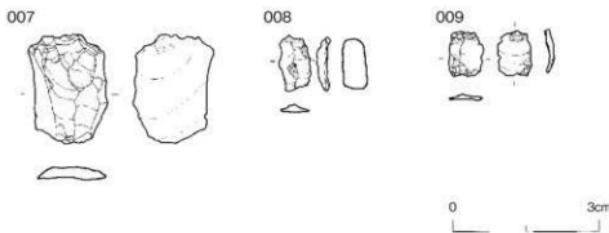
SE008（第 9 図） 調査区下段端に位置する。段造成後堆積した畠の土と SD007 を切る。平面は円形で径 95 cm、深さ 246 cm を測る。底部は八女粘土を突き抜けて暗褐色砂層に達している。埋土は灰色でやや茶色を帯びる。遺物は須恵器壺、須恵器壺蓋、須恵器高台付壺や瓦らしき破片など古代の遺物が出土しているが、古代まで遡る可能性は低く、土色や出土瓦から近世以降と思われる。出土遺物（第 7 図 002 ~ 005）。002 は丸瓦瓦頭の一部か。瓦質で表面は黒色、胎土は灰色を呈す。白色砂と雲母片を含む。断面に粘土貼り合わせの痕跡がみえる。復元径は 8 cm 前後を測る。003 は須恵器壺の胴部片である。器面は青灰色、胎土は赤褐色を呈す。胎土中に白色細砂を少量含む。焼成は良好である。外面に帯状タタキ、内面に同心円タタキの痕跡が残る。004 は須恵器壺蓋の天井部分である。灰白色を呈し胎土は精良である。外面には回転ヘラケズリの痕跡が残る。内面はナデを施す。時期は 6 世紀後半か。005 は須恵器高台付壺の高台部である。淡青灰色を呈し、胎土中に白色細砂を少量を含む。焼成は良好である。外面は回転ナデを施す。内面は剥落が多く不明である。

4) 溝

丘陵西側の造成面縁辺で溝を 2 条確認した。溝の方位は南北方向に近く、4 次調査で出土した古代の溝に平行するが、埋土が異なっており同時期とは考えがたい。畠の排水用の溝と思われる。

SD007（第 7 図） SE008 に切られる。幅は 90 ~ 200 cm を測る。埋土は地山が少し汚れた茶赤褐色土で一気に埋没している。流水の痕跡はみられない。白磁瓶の破片の他、移動式竈と思われる破片が 1 点出土した。出土遺物（第 7 図 006）。006 は白磁瓶の胴部片である。胎土は精良で灰白色を呈し釉は透明である。胎土外面には回転ヘラケズリ、内面にはナデを施す。内面には釉ダレがみられる。上面に存在した遺構からの流れ込みで、遺構の時期を示すものではないと思われる。

SD017（第 7 図） SD007 の西側に位置する。南端は削平で消滅しており、SD007 との切り合は不明である。埋土は灰色で砂を少量含む。素焼きの土器片が 1 点出土した。近世～近代と思われる。



第8図 その他遺物実測図2 (007~009は1/1・1/2)

5) その他の遺構と遺物（第8図）

縄文時代の遺構と遺物 縄文時代の明確な掘り込みは確認できなかったが、調査区中央部にシミ状に広がる暗茶褐色土や後世の遺構から黒曜石片やサスカイト片が出土している。暗茶褐色土は性格が不明なため遺構一覧表では包含層としたが、風倒木の窪み等の可能性もある。黒曜石は破片のため時期が不明であるが、縄文時代の可能性もあると考えて図示する。007～009は黒曜石片である。007はSK006から、008はSP018から、009は暗茶褐色土（SX005）から出土した。007は長さ2.2cm、幅1.5cm、厚さ2mmを測る。008は長さ11mm、幅6.5mm、厚さ2mmを測る。009は長さ8.5mm、幅7mm、厚さ1mmを測る。側面からみると「く」の字形に反る。

古代以降の遺物

010は瓦質环である。SP002から出土した。口縁部外面は暗灰色、その他は灰白色を呈す。胎土は精良である。011はSP009から出土した須恵器环の口縁部である。口縁端部は暗灰色で、その他は淡青灰色を呈す。胎土は精良で、焼成は良好である。012～015は調査区南西端の攪乱から出土した。012は須恵器大甕脚部片である。色調は青灰色を呈し、胎土は精良で砂はほとんど含まない。器壁の厚さは16mmを測る。調整は外面が全面剥落のため不明、内面は青海波紋のタタキである。013も須恵器甕の胴部片である。色調は外面が灰白色、内面は青灰色を呈す。胎土は精良で砂をほとんど含まない。焼成は良好である。器壁は厚さ9mmを測る。調整は外面が格子タタキの後にナデ、内面は青海波紋のタタキである。014は須恵器壺蓋と思われる小片である。色調は暗青灰色を呈し、胎土中に白色細砂を少量含む。調整は回転ヘラケズリ、内面はナデを施し焼成は良好である。外面側に多くみられる剥離は耕作時に鋤等で打たれた痕跡か。015は砂岩製砥石である。現状で63×65mm、厚さ18mmを測る。砥面は1面のみで表面には細かな打ち欠きの窪みが多数みられる。

3 小結

今回の調査では掘立柱建物1棟と土坑3基、溝2条、井戸1基が出土した。掘立柱建物は遺物が出土せず、また4次調査で出土した掘立柱建物とは規模も方位も異なるため、時期は不明である。4次調査では南側縄文時代晚期の埋甕や古代の溝が出土しており（第4図）、それらが6次調査に統くものと思われたが、黒曜石片など遺物は若干出土したものの、両時期の確実な遺構は検出できなかった。

中村町遺跡ではこれまで弥生時代後期後半から古墳時代前期と古代の遺構が確認されており、弥生時代後期後半から古墳時代については3次調査など丘陵北側で密度が濃く、古代については遺構は少ないものの各調査区で遺物が出土しており、丘陵全体に広がる可能性も考えられている。最近の4次と5次調査で新たに縄文時代晚期の集落と縄文時代前期後半から中期前半の包含層が出土しており、弥生時代と古代に加えて縄文時代の集落についてその規模や性格を明らかにするという課題ができた。今後の周辺の調査が期待される。

表2 遺構一覧

遺構番号	性格	遺物	時代
001	柱穴状遺構	土器小片	不明
002	柱穴状遺構	丸形容 1点、須恵器环？ 1点	中世以降
003	柱穴状遺構	サスカイト 1点、土器小片 1点	不明
004	土坑	黒曜石片 1点	縄文時代？
005	張含層	土器小片 2点	縄文時代？
006	土坑	黒曜石片 1点、サスカイト 1点、桂化木片 3点	縄文時代？
007	溝	山積砂、移動土堆？片	古代末・近世
008	井戸	人？ 黒曜石、須恵器环？、須恵器高台环？、土器片	古代以降
009	柱穴状遺構	須恵器环？ 1点、土器片 1点	古代以降
010	土坑	須恵器环 1点、土器小片	古代以降
011	張含層	小礫	不明
012	張含層	小礫	不明
013	張含層	黒曜石 1点	縄文時代？
014	張含層	黒曜石 1点	縄文時代？
015	張含層	黒曜石 1点	縄文時代？
016	張含層	黒曜石 1点、サスカイト 1点	縄文時代？
017	溝	土器小片 1点	上世から近代
018	柱穴状遺構	黒曜石 1点	縄文時代？
西西瀬原地盤		須恵器大型片、須恵器环？片、須石	



1 調査区全景（南西から）



2 SB01 (西から)



1 SE008 (西から)



2 SD007 土層 (北から)



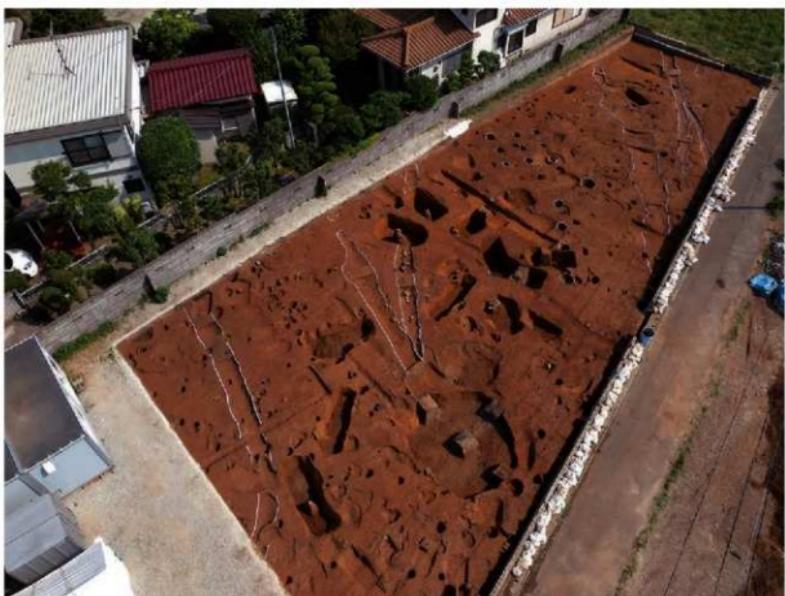
1 SD017 土層（南から）



2 谷部確認トレンチ（南から）



1 4次調査全景（南西から 手前が6次調査区）



2 4次調査全景（北から）

報 告 書 抄 錄

ふりがな	なかむらまちいせき							
書名	中村町遺跡5							
副書名	中村町遺跡第6次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1160集							
編著者名	屋山 洋							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	福岡市中央区天神1丁目8-1							
発行年月日	2012年3月16日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
中村町遺跡4次	南区若久1丁目 16番地	40134	20167	33° 33' 21"	130° 24' 47"	2010年 10月26日～ 2010年 11月26日	163 m ²	公園建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
中村町遺跡第6次	集落	縄文時代晚期？ 古代～近世	包含層（風倒木痕か） 溝、土坑、掘立柱建物、 井戸	黒曜石片 須恵器壺蓋、土師楕、 瓦				
要約	本調査区は丘陵上の南西側に傾斜する斜面上に位置する。全体に重機による搅乱が分布しており、遺構の遺存状態が悪かったため、期待された縄文晚期前半と古代と確實に判断できる遺構は確認できなかった。出土した遺構は土坑3基、柱穴状遺構17基、暗茶褐色の包含層（風倒木痕か）、溝2条、井戸1基で包含層は縄文晚期、柱穴状遺構と土坑は古代から中世の可能性がある。井戸と溝は烟に伴うものと思われ、時期は近世から近代と思われる。							

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1160集

中村町遺跡5

—中村町遺跡第6次調査報告—

2012年（平成24年）3月16日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 株式会社九州カスタム印刷
福岡市博多区東比恵3丁目16-15
TEL (092) 414-7554

